

# ウォンテッド

2008(平成20)年7月17日鑑賞(試写会・TOHO シネマズ梅田)

★★★★★



監督＝ティムール・ベクマンベトフ／原作＝マーク・ミラー、J.G. ジョーンズ『WANTED』(グラフィック・ノベル)／出演＝ジェームズ・マカヴォイ／モーガン・フリーマン／アンジェリーナ・ジョリー／テレンス・スタンプ／トーマス・クレッチマン／コモン／マーク・ウォーレン／デヴィッド・パトリック・オハラ／コンスタンチン・ハベンスキー／ダート・バクタデツ(東宝東和配給／2008年アメリカ映画／110分)

……表看板はアンジェリーナ・ジョリーとモーガン・フリーマンだが、真の主演は若手有望株のジェームズ・マカヴォイ。負け犬からプロの殺し屋への転身は映画なればこそだが、必然性と説得力があればオーケー。神秘的秘密結社フラタニティを軸としたストーリー展開は読みやすいが、ひょっとしてそれは、ティムール・ベクマンベトフ監督が仕掛けた大いなるワナ……？ムチャ面白い展開の後に訪れる、アツと驚く結末とは……？

## フラタニティの哲学は「1を倒して、1000を救う」……？

CIAの誕生秘話を描いた『グッド・シェパード』(06年)には秘密結社スカル&ボーンズが登場したが、『ウォンテッド』に登場するのは、1000年以上も前から存在しているという秘密組織フラタニティ。映画の冒頭、いきなりそんなワケのわからない字幕が流れてくるから一瞬戸惑うが、このフラタニティは大切なキーワード。

フラタニティの哲学は「1を倒して、1000を救う」だが、プレスシートの冒頭には、スローンがウェスリーに語るフラタニティ入会の殺し文句がうまく要約されているから、それを全文掲載しておこう。

「アキレスの時代以来、神に変わり『運命の意思』を実践してきた秘密の暗殺組織“フラタニティ”。君は、その王位継承者である。羊のように群れて生きるか、それとも潜在意識のなかの狼を目覚めさせるか、逃れようとしても無駄だ、すでに運命は選択されているのだ。我々の目的は世界の秩序を守ること。“1を倒して、1000を救う”君は我々の最後の望みだ。今こそ、その能力を覚醒させなければならない。さあ、仲

間になろう」

こんな甘い誘いを受ければ、誰だってその気になるのは当然だが……？

## 主役はこの若手！

この映画の資料では、アンジェリーナ・ジョリーとモーガン・フリーマンという2人のビッグネームが目立ち、プレスシートのキャスト紹介でも、アンジェリーナ・ジョリーとモーガン・フリーマンの間にジェームズ・マカヴォイがもぐり込んでいるから、形式上の主役はアンジェリーナ・ジョリー。

『ウォンテッド』は6月27日に全米で公開され、オープニング週末3日間の興行収入が5093万ドルを記録する大ヒットとなったらしい。試写会ではそれを紹介する1枚のペーパーが配布され、そこでは「アンジェリーナ・ジョリー主演『ウォンテッド』『Mr. & Mrs. スミス』を超え、歴代1位を記録！」と書かれている。つまり、宣伝用としては大女優アンジェリーナ・ジョリーを表看板として紹介したいわけだ。

しかし、実はこの映画の主役は、しがない「負け犬人生」を歩んでいる25歳の青年ウェスリー・ギブソンを演じたジェームズ・マカヴォイ。美人女優はすぐに覚えても、俳優の覚え方はイマイチの私は、その名前を聞いてもピンとこなかった。しかし、『つぐない』（07年）ではキーラ・ナイトレイの相手役、『ナルニア国物語 第1章ライオンと魔女』（05年）では半人半獣の“タムナスさん”と聞いて、その顔をすぐに思い出した。私は彼を、その他『ラストキング・オブ・スコットランド』（06年）や『ベネロピ』（06年）でも観ているから、もう少し俳優の名前も覚えなければ。

そんなジェームズ・マカヴォイが、アンジェリーナ・ジョリーやモーガン・フリーマンという2人のビッグネームをさしおいて堂々の主役を射止めたのは超ラッキー。今後、『トランスフォーマー』（07年）や『ディスタービア』（07年）のシャイア・ラブーフと共に、若手男性俳優成長株のトップを走ること確実！

## ここまで米露の融合が……？

2008年7月7日～9日の洞爺湖サミットではG8が一堂に会したが、ロシアがG7に入ったのは1997年。1950～60年代の東西冷戦の時代は、リチャード・バートン主演の『寒い国から帰ったスパイ』（65年）などシリアスなスパイ映画が大はやりだったが、これらは西側の視点で描いたものばかり。また、1991年のソ連邦の崩壊から

ロシア連邦の成立、そして08年5月にメドベージェフが第3代目の大統領として就任するまで、ロシアは激動に激動を重ねてきたが、近年「資源大国」ロシアの存在感と他を圧倒する国力が増しているのと同じように、ロシア映画のインパクトも強くなり広がっている。

その代表が、『ナイト・ウォッチ／NOCHNOI DOZOR』（04年）と『デイ・ウォッチ』（06年）のティムール・バクマンベトフ監督。そんな実績をひっさげた1961年の旧ソ連カザフスタン生まれのティムール・バクマンベトフ監督が、アンジェリーナ・ジョリー、モーガン・フリーマンという二枚看板が出演するハリウッド映画の監督として抜擢されたことに、私はビックリ。

米中接近は1970年代から顕著になったが、21世紀の今、映画の世界における米露融合がここまで進んでいるとは！

## 「視覚効果」と「音響効果」の融合は？

私の素人感覚では、『マトリックス』（99年）あたりから、ハリウッド映画の映像づくりは新しいレベルに入った感がある。そしてプレスシートによると、ティムール・バクマンベトフ監督は、『ウォンテッド』によって「映像表現をまた新たな次元に突入させた」らしい。「その新次元映像のポイントは、『視覚効果』と『音響効果』の融合だ」が、「視覚と音響を掛け合わせた表現という発想は、バクマンベトフ監督独自のもの」らしい。さらに、「〈アサシン・モード〉を主人公ウェスリーの主観映像として描き、観客たちに自分自身の体験として感じさせる『体感映像』を創り出すことに挑戦した」とのことだが、さてその実態は……？

私には理論的なことはサッパリわからないが、『ウォンテッド』の映像にこれまでの映画とは全く違う目新しさがあることはまちがいないから、まずはそれを実感してもらいたい。そして、そんな映像の理論と実務に興味のある方は、さらに突っ込んだ勉強を。

## R指定になりそう？

格差社会が広がる中、「負け組」がどんどん増えていると警鐘が鳴らされているが、私はそんな一面的な見方には反対。しかし、アルバイトではなく正規雇用されているウェスリーが、太っちょの女上司から毎日のようにイビられ、不安発作用の薬を欠か

せない姿を見ると、負け組とか負け犬の悲哀を実感！

『ウォンテッド』はそんな主人公が一転してフラタニティのエースとして活躍する姿を描く映画（？）だが、上映前のアナウンスによると、なぜか『ウォンテッド』はR指定になりそうらしい。そりゃ一体なぜ……？ そう思っていると、その原因が、映画冒頭の問題提起型のシーケンス（？）が終了した後に展開される物語の最初のシーンにあることが明らかに。すなわち、そこに登場するのは、オフィスの机の上で展開される男女のファックシーン。どうもこれは、ウェスリーと同棲中の恋人がウェスリーが親友と思っていた同僚の男とやりまくっているらしいから、ウェスリーは大ショック！

つまり、ティムール・ベクマンベトフ監督はウェスリーの負け犬ぶりを示すために、映画冒頭にこんな激しいファックシーンを登場させたわけだが、これによって『ウォンテッド』がR指定を受けることになれば、ちょっとバカバカしいのでは……？

### こんなの、あり……？

映画の冒頭、いかにもティムール・ベクマンベトフ監督の新次元映像らしいシーケンスが登場する。それは、高層ビルの一室で、道路の向こう側の高層ビルの屋上から狙撃犯に狙われていることに気づいた男が、長い廊下を助走をつけて走り出したかと思うと、ビルの窓を破って飛び出し、銃弾をぶっ放しながら向こう側に到着したかと思うと、みるみるうちに狙撃犯たちをやっつけるもの。ところが、この数人の狙撃犯は「おとり」だったらしく、Xと刻印された場所に立ち止まったこの男は、あえなく一発の銃弾によってジ・エンド。

そんなシーケンスがあつと言う間に駆け抜けていくわけだが、ここで殺された男は一体誰……？ そして、字幕で流れていた秘密結社フラタニティとの関係は……？ それにしても、こんな風に人間が高層ビルと高層ビルの間をジャンプしたり、ジャンプしながら拳銃をぶっ放したり、こんなのあり……？ 最近の映像を楽しむためには、そんな疑問を持つてはダメ！

「こんなのあり？」と思うのは当然だが、そこは観客も自己解放と自己変革が必要。つまり、①銃の弾道は曲げることができること、②それはテニスのショットと同じ理論であること、③そのためには「撃ち方」の訓練が不可欠なこと、を信じなければダメだ。野球の世界でも、カーブやドロップそしてフォークが最初に登場した時は魔球

だったし、ゴルフの世界でも、一流のプロはストレートは当然としてフックやフェード、スライスを自由に打ち分けるのだから、銃の世界だって弾丸の進行方向を自由に曲げる撃ち方があっても不思議ではないはず……。そんな風にすぐに信じてしまうあなたは、見事ティムール・バクマンベトフ監督の術中にはまっているわけだが、こんな映画を楽しむためには、それでもいいのでは……？

## ウェスリーの自己解放と自己変革は？ その契機は？

ウェスリーが会社内で口を開けば、女上司に対して「アム・ソーリー」とくり返し、一度は言ってみたい「Fuck You！」と叫ばないのはなぜ……。それは、現状を維持することに汲々とし、自己解放と自己変革に及び腰だから。もちろん、誰でもそうなのは当たり前。だって、将来の見通しもないまま、せっかく就職できた会社の上司が気に入らないから、「Fuck You！」と叫んで辞めてしまったのでは、翌日からおまんまの食い上げになってしまう恐れがあるから。

しかし、そんな風にビビっている間は何をやってもダメ！ とにかく自分の力を信じて、自己解放、自己変革にチャレンジしなければ。ウェスリーがそう決意し、バカ女上司に対して、うっぷんの限りをぶちまけて、自分から会社を「辞めてやる」契機となったのは、ある美女との出会い、そしてある怪しげな秘密結社との出会い。

さてこれは、ウェスリーにとって幸せ……。それとも不幸せ……？

## ますます進化するアンジェリーナ・ジョリーのアクションに注目！

美女でありながら男勝りのアクションが「売り」という女優の双璧は、『バイオハザード』シリーズのミラ・ジョヴォヴィッチと、『トゥームレイダー』(01年)、『トゥームレイダー2』(03年)のアンジェリーナ・ジョリー。もっとも、アンジェリーナ・ジョリーはアクションだけではなく、『Mr. & Mrs. スミス』(05年)のようなコメディ(?)や、『グッド・シェパード』のような問題提起作、さらに国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) の親善大使として活躍している彼女のナマの姿を彷彿させる『すべては愛のために』(03年)や『マイティ・ハート/愛と絆』(07年)など、その幅広さはまさにハリウッド女優のトップ。

そんなアンジェリーナ・ジョリーが、『ウォンテッド』ではクールで優秀な殺し屋フォックス役として登場し、ウェスリーの教育係の役割に徹して見事なアクションを

見せてくれる。その第1は、車のボンネットに寝そべてのド派手な銃撃戦。第2は、列車の屋根の上で展開される、しなやかかつセクシーなパフォーマンス。主役の座を若手のジェームズ・マカヴォイに譲りつつ、自分の役割をきっちりこなして存在感を見せつけているのはさすがに立派なもの。そこで注目目はセリフを極力抑えたアンジェリーナ・ジョリー扮するフォックスの結末だが、それはあなた自身の目で……。

## ボスの存在感と説得力は圧倒的だが……

冒頭に引用したフラタニティへの「勧誘文」は文章もよくできているが、それをモーガン・フリーマン扮するフラタニティのボスであるスローンがしゃべるから、よい説得力がある。張<sup>チャン・イーモウ</sup>藝謀監督の念願どおり『単騎、千里を走る。』(05年)に出演した高倉健と同じように、なるほど、存在感とはこういうことを言うのかと納得。

ウェスリーが見る限り、スローンには2つの顔があった。すなわち、フラタニティのボスとしての怖い夜の顔(?)と、巨大な紡績工場の社長としてテキパキと社員たちに指示をしている昼の顔だ。その両者とも圧倒的な存在感があり、その語りには説得力があるから、ウェスリーならずともすべての観客はその魅力の虜になるはず。ティムール・ベクマンベトフ監督の『ウォンテッド』が大スター共演の魅力だけではなく、作品としても面白いのは、そんな風に観客を虜にした挙げ句、ラストにアツと驚く仕掛けが用意されているところ。

こう書くだけで、既に「そんなことバラしていいの?」というお叱りを受けそうだから、これ以上のネタばれは避けるが、とにかく面白いこと請け合い!

## 冒頭のミスター・Xはウェスリーの父親だって……?

そんなスローンは、①映画冒頭のシークエンスで殺されてしまったミスター・X(デヴィッド・パトリック・オハラ)は、フラタニティに属する偉大な殺し屋であり、ウェスリーの父親であること、②ドラッグストアでウェスリーを襲ったクロス(トーマス・クレッチマン)は、フラタニティの敵対者であり、フォックスはウェスリーを助けるために登場したことを説明したから、半信半疑ながら次第にウェスリーがそれを信じていったのは当然。また、そんなスローンから「さあ、仲間になろう」と誘われたことが、あのクソ女上司に対して「Fuck You!」と叫び、会社を辞めることができた大きな理由。そして、フラタニティに入ると決め、父親を狙った刺客クロスを

いつか自分の手で倒すと誓ったウェスリーが、以降厳しい訓練に戸惑いながらも必死で食らいついていったのは当然だ。

スローンが持つフラタニティのボスとしての最大の特権は、機織り機の縦糸と横糸が二進法のコードで表示する、抹殺すべき人物を読みとること。さあ、「運命の機織り機」の縦糸と横糸は、いつスローンに対して「クロスを殺せ！」という指示を出すのだろうか……？

## 個性豊かな仲間たちの面々は？

8月8日から始まる北京オリンピックまであと約20日。オリンピックでのメダル獲得に向けて選手たちは必死だが、世界の頂点に至るまでには長い長い努力の時間が必要だったはず。ところが、映画はその点ムチャ便利。つまり、『ロッキー』シリーズを観ればわかるように、激しい練習シーンをいろいろと紹介していだけで、みるみるうちにそれまで素人だった主人公がたちまち世界チャンピオンに挑戦できるまでに成長するから面白い。

『ウォンテッド』もそれと同じで、それまで拳銃もナイフも格闘技も全く縁もゆかりもなかったウェスリーが、急速にプロの殺し屋として成長していくサマが面白い。彼が急速に成長できた理由の第1は、どんなケガもこの風呂に浸かれば、「白血球を刺激して〇〇、△△、××……」という理論によって、たちまち治るというすぐれもののおかげ。こんな便利なものがあれば、野球、サッカー、柔道、剣道、相撲などケガに悩むすべてのスポーツ選手への吉報だが、残念ながらこれは映画の中だけのつくり話。

ウェスリーが急成長できたのは、第2にフォックスの他、ザ・ガンズミス（コモン）、ザ・リペアマン（マーク・ウォーレン）、ザ・エクスターミネーター（コンスタンチン・ハベンスキー）、ザ・ブッチャー（ダート・バクタデツ）らの指導よろしきのおかげ。拳銃、ナイフ、格闘技、爆弾などの特技を発揮するこれらの個性豊かな仲間たちにも注目だが、さて映画のラストに彼らが直面する現実とは……？

## 実は、父と息子の絆の物語……？

フォックスを中心とする先輩たちの指導の下で、厳しい訓練を積んだウェスリーの実戦初デビューがスナナリいかなかったのは、普通のハリウッド映画にはない人間的

なところ……？ つまり、高速列車の屋根の上からピンポイントで、銃弾をカーブさせてターゲットに命中させるという技術は既にお手のものだったが、なぜ縁もゆかりもない男を、機織り機が指示するからという理由だけで殺さなければならないの……？ そういう心の迷いがウェスリーに生まれたことが、デビュー戦を失敗した理由。しかし、そんな迷いをボスのひと言によって断ち切ったウェスリーは、2度目の挑戦では見事な成果を。

この映画では、前半のクロスとフォックスによるド派手なカーチェイスと銃撃戦に続いて、後半は高速列車の中に逃げ込んだクロスとフォックスが追っていく中で、大規模な列車転覆事故が発生する。こんな事件に巻き込まれた乗客は迷惑千万だが、この際それは横に置き、ここでクロスが今にも落下しそうになったウェスリーに手を差し出して救出しようとするシーンが登場するから、それに注目！ それは一体なぜ……？

殺し屋としての訓練を積んだウェスリーはそんなことを考える間もなく、このチャンスをかき一撃のもとにクロスを倒したが、さてクロスの本物の姿とは……？ 映画のラストに向けてアツと驚く思いがけない真相が明らかにされていくから、このアクションだけでホッとひと安心し、これで殺された父親への復讐完了と、単純に満足しないように。そしてまた、これ以降のストーリー展開は、あなた自身の目で……。

2008(平成20)年7月19日記